

ICCAE



名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成24年6月1日発行 通巻21号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

国際シンポジウム「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人研究者の育成の現状と課題」

平成24年11月9日(金)14時よりエッサム本社ビル3Fグリーンホール(東京都千代田区神田須田町1-26-3)にて国際シンポジウム「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人研究者の育成の現状と課題」を開催します。

同シンポジウムは、農学国際教育協力研究センター(ICCAE)が農林水産省から委託された「平成24年度地球規模課題国際研究ネットワーク事業(国際研究ネットワーク形成等の推進)」の一環として実施されます。国際共同研究、国際研究フォーラムや国際会議等の農林水産研究分野で国際的に活躍する研究者や国際協力専門家等に求められる資質・能力、その人材育成に向けた大学教育の取組と課題、国際農業研究・ビジネスにおける外国人研究者や民間企業からみた日本人研究者の能力等について講演、パネルディスカッションが行われます。

本シンポジウムへの参加をご希望の方は農学国際教育協力研究センター(担当:浅沼/森、Tel:052-788-6166、Mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp)まで直接お申込みください。参加費は無料です。

科学技術戦略推進費公開シンポジウム「東アフリカの稲作振興のための研究課題と取組の必要性および方向性」開催

名古屋大学農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、2012年2月24日(金)「東アフリカの稲作振興のため

の研究課題と取組の必要性および方向性」と題した公開シンポジウムを名古屋大学野依記念学术交流館において開催しました。本シンポジウムでは、名古屋大学、一橋大学、農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所、愛知県農業総合試験場、ケニアのジョモケニヤッタ農工大学(JKUAT)およびマセノ大学の連携の下、2009年度から2011年度に実施された文部科学省科学技術戦略推進費(旧科学技術振興調整費)による国際共同研究「東アフリカ稲作振興のための課題解決型研究」の研究成果の報告およびその総括と成果活用の方向性に関する討議が行われました。

まず、坂上潤一国際農林水産業研究センターサブプロジェクトリーダーによる基調講演で、アフリカにおける稲作の現状、西アフリカと東アフリカの稲作の違い、稲作生態系毎の課題、稲作研究の現状と成果などが報告されました。また、特別講演として、西垣隆科学技術振興機構(JST)プログラム主管が、JSTによるアジア・アフリカ科学技術協力の具体的内容について説明し、マセノ大学理学部(ケニア)のジョン・オニャンゴ教授が、ケニアにおける国家稲作振興戦略の実施状況を報告しました。

その後、国際共同研究参加者7名による研究成果の報告が行われ、陸稲の耐旱性関連形質の発現に対して土壌の水分含有率や硬度など栽培環境が影響すること、施肥管理によって品種の耐乾性を向上することが可能なこと、複数の耐冷性QTLを組み合わせることで耐冷性を強化できること、ケニア向けもち病抵抗性品種の育成が進んでいること、展示圃場が陸稲の普及に効果を持つこと、種子が農民間を伝わって広まることに期待できること、260万haと推定される天水での稲作可能面積が、降水25%減少、気温2℃低下まで栽培可能となれば、それぞれ191万ha、64万ha増加し、両方を達成できればさらに96万ha増加することなどが報告されました。

総合討論では、これらの研究成果を踏まえ、今後の取組の必要性および方向性について、活発な質疑応答が行われました。その結果、遺伝子型と栽培環境と栽培技術の相互作用に関する研究が必要なこと、ならびにケニアにおけるイネの形質評価システムの構築と現地栽培試験による適応性評価が重要であることが確認されました。また、現地研究者のオーナーシップを高めることが重要であり、農民が自分に適した栽培技術や品種を自ら選択できるようにすることが大事であることが強調されました。本シンポジウムの成果に基づき、ICCAEでは、アフリカにおけるイネの栽培や普及に関する課題の解決に向けた取り組み、ならびに人材育成をさらに推進していきます。(横原大悟)